

特別企画	人間の生命と先端医療
コーディネータ	町野 朔（法学研究科）
基調講演	再生医療—過去・現在・未来 松山晃文（先端医療振興財団先端医療センター研究所）
パネル・ ディスカッション	医療と人間の尊厳 パネリスト：青木清（生命倫理研究所） 矢島基美（法学部地球環境法学科） 青木 研（経済学部経済学科） 浅見昇吾（外国語学部ドイツ語学科）
Summary	Regenerative medicine, starting from an organ/tissue transplant, has developed to stem cell transplantation, and people suffering incurable diseases are now expecting clinical use of embryonic stem (ES) cells or induced pluripotent stem (iPS) cells. However, are we not expecting too much for life science and medicine? Is the “Unbound Prometheus” changing the human being and humanity? Would the medical industries, which pursue financial profits, take interests in the rich and neglect the poor in the end? In short, does advanced bioscience technology really serve “human dignity” ? There are many issues to discuss.

1. 目的と背景

昨年度の特別企画「環境」の後、今年度は「生命」がテーマに選ばれたが、特に「先端再生医療と倫理・法」を議論したらどうかというのが、研究機構の示唆であった。

確かに、マスコミ、世論、生命倫理研究者の関心は依然として、あるいは一段と臓器移植問題にあるが、医療と医学研究は、体性幹細胞、EG細胞、ES細胞、クローン研究、iPS細胞（これら言葉についてはシンポジウムの中で説明されることになる。）による再生医療の実現を目標として急速に動いている。我々の議論はこれについて行くことができていない状況である。この分野では熾烈な国際競争が続いているが、政府は国内の研究者に格別な支援を行おうとしている。ここで「社会的合意」を語ることはどのような意味を持つのであろうか。

考えなければならないことは沢山ある。

2. 基調講演

今回の基調講演「再生医療—過去・現在・未来」をお願いした上智大学生命倫理研究所所員・松山晃文氏は、日本の再生医療の先端で活躍される若手研究者であり、行政（厚生労働省）の側からも日本の研究者の苦闘を観察した経験を持つ方である。我々は、氏の講演によって日本の医療の歴史、再生医療研究の現段階がどのようなものか、国のこの問題に対するスタンスを初めて知ることになるが、我々はかなりの混乱と当惑を経験することになるだろう。しかしこれは、「社会的合意」「インフォームド・コンセント」「人間の尊厳」などを単なるスローガン、葵のご紋として用いることなく、研究者と社会との関係、さらには医科学研

究と人々との関係を具体的に、真剣に考える（take it serious）初めの一步である。

3. パネル・ディスカッション＋討論

4人のパネリスト全員はそれぞれ異なる研究領域に属する。「真剣に考える初めの一步」というシンポジウムの趣旨から、松山講演への率直なリアクションをそれぞれからいただき、次いで全体討論に向かう。事前に、講演者、パネリスト、コーディネイターによる打合せは行っているが、当日の議論は、コーディネイターの整理の中で自由に、率直にしていきたいというのが我々の希望である。そこから「これは実は問題でない」ということばかりでなく、「何が問題か」ということが見えて来るものと思われる。

4. 「人間の生命と先端医療」のその後

一見華々しく見える日本の生命倫理の議論は、実はまだ始まったばかりである。まして再生医療の問題については、「何を、どう考えたらいいか」さえ分かっていない状況である。今回の企画では、「真剣に考える初めの一步」を踏み出せることが最大の関心事である。まずは、再生医療の現実、再生医療でどれだけの人が救われるか、国家予算がこれにどれだけ使われているのか、それにどれだけの意味があるかを知ることが必要である。今後の展望・展開はこのシンポジウムが示すところとなろうが、これを機会に上智大学研究機構と上智大学の研究者がこの議論の重要性に相応しい研究体制を確立して行くことを希望している。

【基調講演要旨】

演題：「再生医療—過去・現在・未来」

講師：松山晃文（財）先端医療振興財団 再生医療研究開発部門 膝島肝臓再生研究グループ

医学の進歩は、多くの病める人々を救ってきました。アスピリン（解熱鎮痛剤）のような植物への知識から得られた低分子化合物、ペニシリン（抗生剤）のような微生物学的知識から得られた低分子化合物、生物学的知識から得られた遺伝子医療や抗体医薬は、その当時において常に最先端医療であり、現在は当然の医療となっています。今、最先端の医療として期待されているのが臓器移植の経験と幹細胞生物学的知識に立脚する再生医療です。これまでの医療とこれからの医療—再生医療—の大きな違いは、「人」から得られた臓器組織あるいは細胞を用いるという点にあります。私自身循環器内科医として我が国再開第1例目の心臓移植にかかわった経験から、臓器移植から再生医療への研究者の思いをお伝えし、「人」から得られた臓器組織あるいは細胞を用いて治療行為を行うことについて、「生命倫理」の観点から見た議論に話題を提供できればと考えております。

Advancing of medicine has been saving many sick people. Low molecular compounds provided from knowledge to the plant, for example aspirin, those provided from the microbiologic knowledge, for example penicillin (antibiotic), and the gene therapies and the antibody drugs provided from biological knowledge, had been always on the cutting edges in those days, and the medicines are now conventional. Today, regenerative medicine, which has been based on experience of organ transplantation and the knowledge of stem cell biology, is expected as the medical care in future. One of the issues is human materials including organs, tissues and cells must be procured from human beings for application to the diseased patients. From my experiences as cardiologist and researcher, I tell you how researchers have been thinking and acting.